



琉球大学附属図書館長 仲 座 栄 三

琉球大学の敷地内の中心的位置にあり、大学における「学」のランドマーク的存在が図書館である。歴史的趣を持ち、赤色のレンガ壁が輝く図書館は両手を広げるようにそこに建っている。その正面玄関には、「学而不厭」と刻まれた碑があり、その上に2体のシーサーが座している。そのシーサーは「学ぶシーサー」と呼ばれている。学而不厭（がくじふえん）を、私は「学問の世界は際限なく広がっている」と解している。日本人初のノーベル賞（物理学）受賞者となった湯川秀樹博士は、1963年に、当時首里にあった琉球大学を訪問された。その際の直筆の書が、図書館正面玄関の碑に刻まれている。

さて、図書館を抜け、ポプラ並木を抜けると小高い十字路にでくわす。その十字路は時に、東に出る太陽を仰ぎ、大円線上の西に月の入りを望むことができる。ここは、琉大を走る小道の中で最も高い標高位置にある。特別な十字路だ、そこに立って360度見渡してほしい。琉球大学の様が見えてくるだろう。琉球石灰岩で敷き詰められた歩道の両側に並ぶポプラの木々は、沖縄の冬、12月末頃には、美しい紅葉を見せる。振り向くと、そこにアインシュタインと湯川秀樹が散歩している姿が思い浮かぶ。私は、この道をアインシュタイン・湯川秀樹の散歩道と呼んでいる。

十字路を経て、球陽橋のテラスからパリの灯とエジソンの灯を望むことができる。もちろんパリとは畑の意であり、農学部を指している。エジソンの灯は、工学部から漏れる光のことである。千原の池からは時に雲が湧く。水面に波紋が広がる。その姿を先人達は、巣立つ学生達に例えたのである。

工学部まで足を運ぶと、真新しい建物にでくわす。そこに風に耐えてそびえる特別な黒木を見る。館内には

2014年ノーベル物理学賞を受賞された天野浩博士の来学記念の書「人々のために」が掲げられている。天野博士は学や研究の目的を「人々のために」と書いた。

図書館から始まる想像の旅の末に、あなたは何を思うのだろうか？その感性を、思いを、「びぶりお文学賞」に投じてほしい。際限なく広がる学問の世界を駆け巡ってほしい。

（なかざ えいぞう：工学部工学科教授）



琉球大学工学部教授 仲座 栄三

「恐竜は図書館を持たなかったから滅びた」このような説明を受けたとき、その意味を解せなかった。恐竜が図書館にある図鑑等で解説されていることは事実だが、やはりあの意味が解せない。パスカルは、人間たる根源が思考することにあるとし、「人間は考える葦である」と説いた。アインシュタインは、「不思議なことは、いかような難しいことでも解るようになることである」と言い、「神は老獪だが悪意はない」と説明した。図書館に足を踏み入れてみると、そこはあたかもタイムマシンのように、人を現在から、過去、あるいは未来へと導いてくれる。「恐竜はなぜ滅びたのか？」が、科学の粋を結集して説明されている。当然ながら、それは冒頭で述べた疑問への解ではない。

数学という不変的言葉を持つ人類は、数学をもって自然現象を書き記し、その数百年数千年後の姿、あるいは見果てぬ宇宙の彼方までも想像させる。文字を発見開発した人類は、その歴史を記し、先人の教訓や拠るべき道が何たるかを記し、そして万物の法則について記してきた。それらの全ては、いま図書館に集積されている。ここら辺に、始めに述べた難問を解く鍵があるように思える。

私は学生時代、よく部活動前に図書館に通った。数学、物理をはじめとして専門書をひたすらに読みあさった。すると、授業内容が良く理解できるようになった。私にとって図書館はかけがえのない恩師のような存在である。ノーベル物理学賞受賞者である朝永振一郎博士は、「だれでも一日に二時間学べば、一流の研究者になれる」と説いている。



「Boys, be ambitious!」で知られる
クラーク博士像の側に立つ著者

三つ子の魂は百までもと、0歳から3歳までの幼少期が人の成長に重要であるように、社会に生まれ出るために最も大事な時期が、大学4年間でもあろう。宗教が神聖なる場所を必要とするように、我々学問を志す者には、図書館という学びの聖地が必要である。そこで、身も心も癒し清めてほしい。

琉球大学の図書館は、学内の建物の中でも最も大きく、そして敷地の中心にあり、両手を広げる様に、学のランドマークとしてそびえている。その中心に立って、「人々のために、大志あり」と叫んでほしい、結果は後からついて来るにちがいない。相対性原理は、誰でも、自分中心的に全てを考えて良いことを保証している。真理の探究は汝らに自由を得さずべし。そして、学の世界は果てしなく広がっている（学而不厭）。

（なかざ えいぞう）